
真剣で恋する5秒前!

斉藤雅夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で恋する5秒前！

【Nコード】

N0434Z

【作者名】

斉藤雅夫

【あらすじ】

三年前、風間ファミリーには一人の男がいた。名前は城下典二。風間ファミリーのまとめ役でもあった彼は父親の都合により海外へ旅立った。2009年春。大和達がゴールデンウィークに旅行へ行っていた最中、彼は九鬼従者部隊の入隊試験を受けていた。かつて過ごした日本に戻り、ある目的を達成させるためだ。その目的とは

プロローグ

昔、風間ファミリーには“五人目の男”がいた。

個性的な風間ファミリーの中で、あらゆる点で偉才を魅せる彼を、皆口々に『神童』と呼んだ。

若干十歳にして英語をマスター。韓国語、ドイツ語を通常生活で問題無いほどのレベル。更に数学では数学検定一級を取る。当時メディアから注目を浴びたが、全ての取材を断り、一部関係者に『神童』と呼ばれる。

武術でも、薙刀、剣術、ボクシング、サバットの各々有名な流派に弟子入りして、技術を全て盗んできた。

ただそんな彼でも『完璧』な訳では無い。極端なだけだ。

彼は興味を持ったモノを、学習するという点で天才的な学習能力を發揮する。

なので、韓国語、ドイツ語をマスターできないのも、学習する過程で飽きたのだ。いや、違うモノに興味を惹かれた言っても過言ではない。数学が優秀でも、漢字は苦手である。一度漢字検定を受けたが惨敗。

武術の技術が完璧でも、最強ではない。普段から体造りを活発に行っていないので、体力的には一般男子学生並。戦闘となっても、戦いを長引かせれば、敗北は免れない。

そんな彼は、風間ファミリーでNo.2的存在で、暴走する風間を上手く落ち着かせたり、ニヒルな大和の話に付き合ったり、クラスから虐められていた京の心の傷を癒したり、百代の戦闘欲求解消の相手にさせられた。

それが彼、『城下典二』しろしたてんじ。

典二は十三歳の夏、空港で風間ファミリーのメンバー全員に囲まれていた。

今日で典二は日本を離れ、ヨーロッパにて新たな生活を始めることが決まっていた。事実上、今日を以って風間ファミリーから脱退する。

「おいおい。皆そんな悲しそうな顔するなよ。俺まで泣きそうになっちゃうよ」

なんて気楽的な声を投げかけるが、殆どのメンバーは下を、空港の地面を見つめている。

「あっちに言っただって、電話やパソコンで連絡取れるだろ？ 今はネットが世界中に繋がっているんだから」

典二はわかっている。風間ファミリーは自分と連絡を取れないので悲しんでいるのでは無い。典二の傍に居られないのが、辛いのだ。

典二を心の拠り所としている京が、特に。

「ゴメンな、京。傍に居られなくて。でも我慢してくれ。今はお前が一人じゃない。風間ファミリーがいるだろ？」

京は地面を見ていた視線を、少し上に修正する。ギリギリ典二の顔が見えない境界線だ。

「うん。私は大丈夫。でも、それとこれとは関係ないよ。典二に会えないのが、寂しい」

しょうがないな。そんな感じで典二は両手を広げた。

「ほれ。最後の別れだ。別れの挨拶代わりに抱擁、てのはどうだ？」
京は迷わずに飛び込んだ。愛しい彼の、これからずっと会えない彼の胸の中に。

それに吊られて他のメンバーも典二に飛びかかった。典二は押しかかるメンバーの体重に耐えながら、泣きながら笑った。

これが、偉才の神童城下典二が生涯初めて流した涙だった。

父の仕事の都合で日本を離れていた典二の元に、久しぶりの日本人の来訪客が訪れていた。

前に風間が気分気のままに旅行していたついでに典二の元へ来訪したので一年振りだ。

日本人の名は『九鬼紋白^{くきもんしろ}』。あの九鬼財閥の末妹であり、九鬼家政界対策部門のトップで在らせられる。

その紋白がわざわざ典二に会いに来たのは他でも無い、九鬼の従者部隊に空きが出来たのだ。その空きを埋めるべく、世界各国をスルウツの旅に出ている。

そんな彼女は日本にいる武神川神百代に数年前、唯一勝ったと言う典二の元に足を運んできた。

しかし紋白は典二に会うなり残念そうな顔をした。

彼女が言うには、典二には輝きが無いと。

星の数ほどの武道家を見て来た紋白は、典二の目が武道家とは違う一般人並の瞳をしていると。輝きの何もかも無い、墮落して夢も希望も持たぬ人間の目だ。

だがまあ当り前であろう。

典二には今の所興味を持つモノが一つも無い。

楽しそうな事を全てこのドイツでやり尽くして、暇を持て余らしていた。

一通りの球技やスポーツは勿論、勉強も物理や化学、そしてギターや音楽関係にも手を出してインディーズながらも固定ファンが付くほど上達。だが全てにおいて、途中で飽きたのだ。スポーツは昔百代と戦った時ほどの緊張感や勝利した時の快感を超えられず、勉強も大学院レベルまで極めたが飽きて、音楽は歌いたい曲を歌ってスッキリしたと。

今は典二の言う充電期間中なので、毎日毎日暇そうにネットで面白

そんなものを探したり、学校の部活動の助っ人として体を動かしているだけだ。

そんな典二に会っても、彼の持つ魅力に気付く者などいない。

「……一応これを渡しておこう」

紋白は護衛役であるクラウディオに指示をして、一枚の紙を典二に渡した。

その紙は『九鬼家従者部隊入隊案内』と書かれた一枚のポスターであった。今回従者部隊の戦闘に特化した者の空きが出来たので、世界各国の有名な道場やジムにこれを配っている。なので入隊試験では相当な手練れが世界各国から参加すると予想される。

「従者に成れると、何か特典でもあるんですか？」

「うむ。賞金か、もしくはその者の能力に見合った優遇をしてやる」

典二は考えた。思考した。妄想した。考察した。瞑想した。思慮した。思索した。黙考した。思い巡らせた。

そして、昔成し遂げたあの快感を思い出した。

父の海外出張でたった三度で終わってしまった、百代との死闘の末の決戦を。

あの時は楽しかった。敗北させられた百代に、厳しい修行を重ねて勝利したと思ったら、たった二週間で自分よりも強くなった百代を

相手にして、二回目の敗北。勝って負けて勝利して敗北するライバル関係が永遠に続くと思っていた、あの日を。

忘れてしまっていた。この数年間くだらないことに興味を持ってやっていたからだ。

典二は思った。

そっか。アイツと出会ったから、他のモノに、戦闘以外に強い興味を示さなかったのか。

だから俺は何をやっても中途半端なのか。

これは百代と完全な決着をして終わらせないと、他のモノに熱中できないな。

いつもの典二に戻った。

否、

本来あるはずべき姿の『城下典二』になった。

彼は紋白達が出て行ったあと、支度を始めた。

九鬼従者部隊に入隊する準備だ。鈍りに鈍って鈍くなつた身体を鍛え直すためだ。

プロローグ（後書き）

はいはいどうも。斉藤でございます。

勿論、斉藤は偽名でございます。一瞬で思いついた適当な名前です。今回ちょっと作者の都合で削除したこの作品でございます。以前お気に入りに登録していた皆様、申し訳ございません。

これからは毎週日曜日には更新する予定です。

今回のプロローグは2000字程度ですが、次回からは最低でも五千字は掲載します。

感想などがございましたら、気軽に書きちゃってください。

ですが『京は大和の嫁だろ』なんて野暮なツツコミは全面拒否でございます。

それではまたらいしゅう~~~~~

第一話 『666』

五月五日。日本では子供の日とゴールデンウィークが重なって、長期休みで子供が笑顔になっている頃、こちらアメリカのアラスカでは、一人の日本人の少年が無邪気で満面の笑みを浮かべていた。右手には刃渡り2mある日本刀に、左手には30cmほどの短刀を所持し、真っ赤な生臭い液体を体中に染み込ませながら。

今日は先日行われた各地の予選を勝ち残った九鬼家従者部隊を目指す者の、最終決戦が繰り広げられていた。

各国の軍人から武道家まで様々の戦闘に特化した者達が金の為名譽の為自分の欲望の為に争っていた。

何でもアリのサドネス。これが最終決戦の内容だ。

武器は己の拳から銃火器まで良しとして、自分の力を最大限に発揮せよ、最後に立っていた一人が合格とされる。

このコロシウムに入場する際、死んでも文句は言わないと契約書まで書かされていた約1200人の人々は武者震いをしていた。

皆が緊張する中、一人の軍人が重火器を使い、文字通り最終決戦のコロシウムを火の海と化した。それがゴングとなった。

ルールに問題は無い。誰もこの最終決戦で開始の合図をするなんて言っていない。

人が入り混じり、火の紅と血の朱がコロシウムを覆い尽くした。

混戦が終わり、気が付けば1200人いた候補者が、ほんの十数人になった。その中にコロシアムを火の海とした奴はいなかったという。

九鬼家の審査員、今回は九鬼家従者部隊序列0番のヒューズがコロシアムを一人観戦していた。

血生臭い試合を、主である紋白には、まだ見るべきではないと判断した故の審査員だ。

ヒューズは気付いた。このコロシアムで、この殺し合いの中で一番狂暴で凶悪な猛者を。

しかしそれに気付いたのはヒューズだけではない。残った候補者の猛者以外が感じ取っていた。いや感じてないと、殺される。

こいつは化物だ。自分一人では殺されるだけだ。

前代未聞、候補者が十数人对少年一人というありえない展開となった。

だが当り前であろう。あの少年が歩いた道には死体しか存在していないのだ。

人を殺したのに笑っている。人数で劣っているのに笑っている。たった一人の少年に恐れ戦く十三名。

幾ら九鬼家の力で罪に問われないからと言って、若干十代後半の少年が、人を殺めることに躊躇しないことが在り得るのか？

緊迫する空気の中、少年の口が開いた。血が混じった唾液が糸を伸ばす。

「653……」

少年は理解不能で意味不明な数字を口走る。候補者の人々も次々と困惑した。

たった一人、ヒューズは理解した。少年が言った数字の意味を。あまりにも残酷な意味を。

「えーっと、いちにいさんしい……」

右の日本刀を肩に乗せ、左手に持つ小回りな短刀で残った人に人数を数え始める。

「じゅうさん。あは、丁度良いや」

無邪気な笑顔で不気味な雰囲気^{かも}を醸し出す少年に、その雰囲気^{かも}に飲み込まれてしまった十三人の候補者。

少年が飛んだ。たった一回飛んだだけで十三人の中央まで辿^{たど}り着いた。

首が飛んだ。少年が剣を一振りすると、先程まで生きていたはずの柔道着姿の男性の首が飛び、首の断面から鮮血が湯水のごとく溢れ出す。

「654……」

ようやく全員理解した。この数字は、654とは、この少年が殺した人の数だ。

更に少年は軽く一閃して弧を描く。十二人の手に持つ武器が、一瞬にして切り刻まれていた。

化物。

この言葉が良く似合う。こんなに適切な表現が他にあるだろうか。

人ヒトに化バけた物モノの怪ケ。略バケモノして化物。

「さあ、どうする？ お前等に残された道は二つ。俺と戦い死ぬか

」

レロツと日本刀から滴したたる血を一舐めする少年。鉄の味が少年の舌を刺激する。

「俺を殺すかだ」

5月7日の朝。

直江大和は不思議な感覚に襲われていた。

懐かしく、そしてとても楽しい前触れだ。

今日は何だか良い事が起きそう。ゴールデンウィークが終わり、これから退屈な授業が始まると思うと、気分が下がるはずなのだが、とてもそんな感じがしない。まるで遠足の前の日のワクワク感だ。

「やあ大和。今日も晴れて良い天気だよ」

「……おはようクッキー。毎度ありがとう」

今日もクッキーと言う九鬼家が造り出した万能ロボに叩き起こされて、寮の食堂へ向かう。

寮と言っても、そこまで大きくなく、一階に男子、二階に女子の各階三人の合計六人で共同生活をしている。

食堂には五人の男女が朝食を摘まんでいる。……いや、一人足りない。大和の所属する風間ファミリーの一人、風間翔一がいない。状況だけで判断するならば、クッキーがまだ起こしていないか、また旅にでも向かったのであろう。

一人の女性が炊飯器の前で皆のおかわりの対応している。

女性の名は島津麗子。名前の麗という字が全く当てはまらない太ったおばちゃんだ。韓流ブームに数年越しで乗り続けているおばちゃんの中のおばちゃんだ。

「おう、大和ちゃんおはよう！」

「おはようございます。相変わらず名前通りに麗しいですね」

心にも無いお世辞で麗子うかがご機嫌を伺う。

「よしいい子だ。朝ご飯にタマゴを追加しといてあげる」

現金なもので、大和は朝食を多くして貰うためにお世辞を毎朝繰り返し使う。

白米を盛る麗子を余所よそに、大和は自分の席へ座った。大和の隣では不機嫌そうに鮭の骨を取り除いている男性が一人。

みなもたかっ
源忠勝だ。

身長は178cmと大きめで、身体も程よく鍛えているイケメン学生。川神学園のイケメン四天王、エレガンテ・クアットロの一人として数えられている。

「ゲンさん、キャップどこ行ったか知らない？」

「あん？ 知らねーよ。あのクッキーっつーロボットが知ってんじやねえのか」

「なら京、お前は？」

「知らない。ここにはまだ来てないよ」

椎名京。

風間ファミリーを心から大切に、今はドイツに住む典二を思っ一途な女の子。今でも諦められずに、ドイツに留学しようと頑張っ

てドイツ語を勉強をしている健気な少女。

「わ、私も、その、今日は風間さんを見てません」

このキヨドキヨドした黒髪ロングの発育の良い女性は黛由紀江。通称まゆつちだ。彼女は先月風間ファミリーに入った、所謂新人^{いわゆる}。

「ん？ 私も知らんぞ。このお新香は凄く美味しいな」

この話半分聞いてない人物はクリステイアーネ・フリードリヒ。一言で表すと、日本大好きなドイツ人の純粋なバカ。純粋であるために、大和に騙されて偽日本知識を教えられる時が度々ある。

「チツ……。早朝に寮を飛び出してつたよ。どっか旅にでも行っただろ」

なんてツンデレ風味に大和に教えてくれる忠勝。実は忠勝、この物語の最高最強のツンデレキャラだ。

大和は麗子から出された白米を受け取って溜息を吐いた。

またか。あの男は授業日数の事を考えているのか？ そんな不安が大和の中で渦巻く。

学園に向かう準備を終えた大和が寮を出ると、そこには奇妙な髪形でキメ顔を決めたガタイの良い男性がいた。

「おはよう岳人」

「よう大和。どうだ、今日の俺様は。何か気付かないか？」

見た感じ、似合わないツンツン頭の、某ラノベ主人公の『お前の幻想ぶっ殺す』が口癖であるあのキャラにソックリだ。

「また何の雑誌見たんだよ。似合わねえよ、そんな髪型」

「そうか？ 俺様的には、結構似合ってると思うんだが」

「多分、モロが見たら爆笑するぜ？」

そのキャラ知っているから。と心の中で囁く大和。

少しして女性組も全員出てくると、岳人はある異変に気付いた。

「あれ？ キャップ遅くねーか？」

岳人は何処から取り出したのかクルミをコリコリ握り始める。さながら映画のラスボスみたいなシーンだ。右腕だけ。

「ああ。キャップならまた旅に出たよ。昨日の今日でまた旅に出るなんて」

昨日、というかゴールデンウィークの風間ファミリー総出で箱根温泉旅行の次の日に旅。本当に予測不可能な風間である。

多摩川でもう一人のメンバー、師岡卓也と合流した。

彼は痩せ型で身長が若干低く、身体を動かすよりゲームや漫画を趣味にしている、風間ファミリーの少ない常識人の一人。

「やー。……あれ、キャップはまたどこへともなく？」

「消えた。ま、気にしないで行こう」

大和が簡潔に答えると、師岡は週刊ジャソプを読み始める。

「お、トラブルンじゃん。俺にも見せるよ」

「ちょ、ガクトなにその髪型！」

「お？ なんだモロはこの魅力を理解できるのか？」

「いやいやいや！！ 全然似合わないよ！！ なにその『お前の幻想ぶつ殺す』みたいな髪型は！！」

見事な突っ込みを入れる師岡だが、結局岳人は仲間のいう事を何も信じなかった。この髪型が決まっていると信じ込んでいる。

多摩川の手前へ差し掛かると、人だかりが見えた。

どうやら今日も、若干18歳にして武神と崇められる川神百代への挑戦者が現れたのであろう。

今回も簡単に手で蟻を払い除けるように簡単素早く挑戦者を倒すと、百代は電話で川神院に連絡して、傷付いた挑戦者の手当てを要求する。

それを終えると百代は風間ファミリーに合流した。

「大和、今回の挑戦者も弱くて欲求不満だ。だからお前で楽しませる」

「止めてくれ姉さん！ 何でいつも俺で弄ぶんだよ！！」

「それはお前が私の弟分だからに決まっているだろう。諦めて私の遊び相手になれ」

大和はこの状況から脱出するため、周りを見渡すと、一人の可愛い女生徒に目を付けた。

「あ、姉さん！ あそこに可愛い少女が！！」

「なに！」と目を輝かせて大和の指先を見ると、一年生と思われる川神学園の生徒を発見。

百代は大和を放り投げ、少女へ文字通り猪突猛進。

「みんなー！ーっ、おはようー！ーっ！！」

百代と入れ違いに、百代の妹である川神一子がタイヤを引きずりながらこちらへ駆けて来た。

元気一杯の笑顔に貧相な体系、そして腰まで伸びた髪を一纏ひとまとめにしたポニーテールが特徴的だ。

これで大体のメンバーが揃った。大和たちは皆思い思いに雑談をし

ながら学園に向かった。

学園中ではある噂が広まっていた。

それは2・Sに転校生がやってくるというモノだ。

大和が聞いた情報によれば、今日職員室で2・Sの担任である宇佐美巨人と高身長で痩せマツチヨのイケメンがいたと、知り合いの学園女子からメールを受けた。

その情報は瞬く間に2・Fに広がり、お祭り騒ぎ状態となっている。

HR始まる数分前、朝寮に居なかったはずの風間が登校した。

何やら険しい表情の風間。取り敢えず風間ファミリーが風間の元へ集まった。

「おいキャップ。お前今までどこ行ってたんだよ」

「そうよ。また旅にでも出たかと思ったじゃない」

「ちよつとした用事だ。お願いだから一人にしてくれ。考えたい事があるんだ」

皆が心配しているというのにこの冷たい態度。どうやら他のメンバーの知らないところで何かがあったらしい。

いつもの風間ではないことを察し、一人一人離れて行った。

しかし大和だけは残って少し食い下がった。

「どうしたんだよキャップ。朝いなかったことと何か関係あるのか？」

「頼む大和、一人にしてくれ」

どうやらこれは本当に悩んでいるらしい。流石にこれ以上は聞き出せないと思った大和は、自分の席に戻ろうとした時、

「 Sクラスに行け。そしたら俺が何を考えているのか大方見当が付く」

そう風間は言い残し、大和は頷く事しかできなかった。

一時限目の授業終了を告げるチャイムと同時に、大和はFクラスを飛び出した。

Sクラスへ向かう。

風間言っていたことが気になって仕方が無い大和は、一時限目の授業中ずっと考えていた。やはり風間の様子がおかしいのは、噂のSクラス転校生と云う訳だ。

大和の手元には一枚の写メが映し出されたケータイを握りしめてい

た。

その写メには、三年前ヨーロッパへ旅立ったままの、あの少年に似た風貌の男子の姿が映し出されていた。

Sクラス前には既に人だかりが出来ていた。きっと転校生に会いに来た野次馬連中だろう。

その人だかりの多くは女性で、黄色い声をSクラスの転校生に送っている。

あまりの人数の多さに少し戸惑った大和であったが、アイツの姿を確認せねばと多数数の女子生徒の中に飛び込む。

一応変な所を触らないように、両手を揚げながらSクラスへと向かっていった。

人垣を乗り越え、Sクラス教室前へ辿り着いた大和であったが、ここでは一人の男子生徒が教室に誰も入れまいと盾になっている。

「お前は……直江大和か」

「ちょっと中に通してくれ。転校生に会いたいんだ」

「駄目だ駄目だ。いつもならまだしも、今日はこんなに入りたがっている生徒がいるんだ。お前を入れたらこいつらも入っちゃうだろう」

どんな事を言っても男子生徒は退こうとしない。

大和はチラッと教室の中を除くと、大和のライバルである葵冬馬が

転校生と思わしき男子生徒と談笑していた。

「頼む！ 入れてくれ！ あいつに、
典二に会いたいんだ
！！」

大和の声が聞こえたのか、冬馬と談笑していた生徒は大和の方へ振り向いた。

間違いない。

あの転校生は、城下典二だ。

「よう大和。久しぶりだな。大体三年振りか？」

「典二！」

「おいおい。そんな大きな声で俺を呼ぶなよ。おい！ その名も無き男子生徒。大和を入れてやってくれ。そいつ友達なんだわ」

チツと軽い舌打ちをして、男子生徒は大和をSクラスの中に入れた。

大和は典二の元へ駆け寄ると、冬馬は典二に一言二言残してその場を離れた。

「典二、お前いつの間に日本に戻って来たんだ？」

「ん〜昨日の夜かな。長い旅だったぜ。色々と」

ハハハと笑いながら典二は大和の肩をバンバンと叩く。肩を叩かれる力が痛いのか、大和は苦笑いをする。

「ちょっと典二に聞きたい事がある」

「おう。何でも訊け」

「なんで帰って来る事を、俺達に伝えなくてキャップにだけ連絡した？」

「あーやっぱりそこが気になる？」

大和の真剣な顔つきに、少したじろぐ典二。ポリポリと頬を掻きながら話し始める。

「別に今回ここに来たのは、お前達、風間ファミリーに戻りに来たわけじゃない。俺の自分勝手な欲望の為にここに居るんだ」

「欲望？」

「ああ。欲望だよ。今は言えないが、その欲望の為にここへ来たんだ。そしてその欲望を達成する為には、風間ファミリーには戻らないことが得策だと考えた」

「ちょっと待てよ。風間ファミリーに戻らないって、どういう意味だよ？」

大和は珍しく慌てた口調へと変わった。普段は考えて常に最良の答えを出す大和がここまで慌てる姿は珍しい。

それほどまでに典二が言ったことに怒りを感じているのだ。

「京が、他の皆がどれだけお前に会いたかったか、お前だって分かるはずだろ？」

「そりゃあ知ってるけど、ちょっと俺にも用事があるんだよ」

「だから、具体的に説明しろ！ 何があったんだよ、ヨーロッパで！」

はあっ、とため息を吐いて、後方の席に特別待遇の席に座る九鬼英雄に顔を向ける。

「すみません！ 俺の正体言っても良いですか？ このままでは大和が納得してくれません」

メイドの忍足あずみに体中をマッサージされている英雄は威風堂々と答える。

「構わん。あれが正式に発表されるのはまだ先だからな。貴様の正体ぐらいバラしても良からう」

「流石です英雄様！ 心が広くなる海のように広いです」

英雄の笑い声をBGMに大和は、英雄と不自然な会話をする典二に目を丸くする。

「大和。実は俺、九鬼従者部隊に就職したんだ」

「……………はあっ!？」

「だから色々忙しいんだ。戻るっても、金曜集会に毎回顔を出せ

るわけではないし」

大和の思考が少し鈍くなった。

あまりにも突発的で唐突で、現実味の無い言葉だった。

「は？ ええ！ な、なに。お前九鬼家に就職したの？」

「まあそつなるな。九鬼家従者部隊序列666位城下典二。以後お見知りおきを」

二時限目の休み時間。典二はただひたすら逃げまくった。

追ってくるのは一人。しかも女性だ。

典二はトイレに行った帰りに、ある女性と鉢合わせになった。

三年前、自分の事を一番思っが一番大切な人物として慕ってくれた少女、椎名京だ。

三年前に比べて身長はそんなに伸びてはいないが、ガリガリだった体系が女を強調する部分を中心に膨らんで、随分女らしくなっていた。

「よう京。たった数年で可愛くなったもんだな。いや肉付きが良くなったんだな。三年前はもうちょっと痩せてたよな」

「会いたかった、典二……」

京に力強く抱き締められる典二は、まあしょうがないなと諦めて、涙で潤んでる京の背中を擦る。久しぶりの再会なので、嬉しすぎて泣いている京を優しく包み込む。

「あーゴメンな京。こっちに来るの急に決まったからさ。連絡する暇なかったんだ」

「良い！！ 典二に会えただけで、私、幸せ」

昔にタイムスリップしたような感じた。泣き虫だった京をこうやって慰めていたのを思い出しながら、典二は恥ずかしさを押し殺して京を宥める。

きつとこれを学園の中でやったら、在らぬ誤解を立てられるな。そんな事を思いながら少し、京を抱き締める強さを増した。

「典二……」

「なんだ、京」

涙で潤った瞳＋上目遣いのダブルコンボで、典二が抱いていた強引なイメージが払拭され、綺麗な心の純粋な女性だと感じた。

「結婚して、子供をつくら」

「年齢的に無理なので遠慮させていただきます」

「じゃあ子づくりだけでも」

結局前の京と変わらない強引なイメージであった。

昼休みの時点で、風間ファミリー全員には典二が日本へ帰ってきたことが広まっていた。

大和はここで全員で会いに行くのは得策ではないと考え、キャップに隠してくれることを全て話してくれと提案。

「……典二から連絡があったのは、朝の五時だ。俺は指定されていた秘密基地まで一人で行ったんだ。大和を起こそうかとも考えたが、スヤスヤ気持ち良さそうに寝ていたから止めた。それから俺は秘密基地で典二と会ったんだが」

「よう典二。久しぶりだな。一年振りか？」

「おうキャップ。相変わらずそのバンダナ着けてんだな」

「当たり前だろ。このバンダナは俺の命だ。こいつを外す事なんざありえねーよ」

「流石キャップ、と言った所か。……本題に入ろう。俺は日本に戻

ってきたが、風間ファミリーに戻るつもりはない」

「……………は？　なんで？」

「詳しい説明は今の所できない」

「おい、じゃあ何で俺を呼んだんだよ。そんなこと言われても俺が納得できると思ってるのか!!」

「思ってるはないさ。俺は今日、お前に伝えに來ただけだぜ？　納得させようなんざ鼻から頭にねえよ」

「……………」

「ああそうそう。これで話は終わりだけど、一つヒントをやる」

「……………ヒントだと？」

「俺はやり残したことをしに來ただけだ。あと仕事を。仕事の内容は夏頃には一般公開されるから、それまで待つてる」

とまあこんな感じでアイツは闇の中に消えた。ちょっと話は端折^{しよ}ったが、内容はこれで合ってる」

キヤップの話聞き、少し考えた大和は在るところに喰い付いた。

「なあ。誰か典二のやり残した事について心当たりがある奴いないか？　それが典二を呼び戻すカギになるかもしれない」

と風間ファミリーに聞いてみるが、目ばしい回答は得られなかった。誰も口を噤くんだまま、一言も喋れずに時間が経とうとした頃、一年でまったく状況の読めなかつたまゆつちが重たい空気を少し和らげる。

「あ、あの、その典二さんとは、一体どんな方なのですか？」

「ああ、まゆつちとクリスは知らないもんな」

「いや、私は知っているぞ？」

え！？ と皆驚きの表情をクリスに向ける。

「城下典二だろ？ ドイツに居た時、よくお父様の軍に出向いて、部下の人と一緒に訓練していたぞ。それに典二からはこの日本について色々な事を教えて貰った。武士道精神とか、日本人の生き様とか！」

ああ、クリスの勘違いは全てアイツの仕業か、と納得の表情に切り替えるメンバー。

「多分典二は、軍人に興味を持ったんだろうね」

モロの言葉で皆も典二の事だからそうなんだなと全てに納得した。典二の性格上、これが一番妥当な考えだと。

「で、典二さんとは一体」

「ああごめんまゆつち。えっと、典二についてだよね」

大和は典二について一通りの事をまゆつちとクリスに伝えた。前に風間ファミリーに所属していて、一度だけ百代に勝利したことも。

「凄いですね、その典二さんって人」

「まああの頃の姉さんは瞬間回復なんてチートな技は持ってなかったから、典二でも倒せたけど、今はどうだろう。差が天と地にまで広がってるんじゃない？」

「大和、お前典二の事を舐めているのか？」

ガバツと大和に後ろから凭れ掛かり、大和に抗議する。

「いや、舐めてるわけじゃないよ。ただ今の姉さんに典二は敵わないでしょ？」

百代はヤレヤレと首を振る。全然わかっていない、そんな風な瞳で大和を横目で見る。

「今は確かに典二と私が戦えば、私が勝つだろう」

「だろ。ならなんでそんな目をするのさ」

「やはり、強者にしか分からない事もある、ということさ。大和、私の発言には嘘は無い。今の典二ならば、私は勝つ。この言葉、覚えておけ」

そう言い残して、百代は昼のラジオ『LOVE川神』の収録へと足を運んだ。

5月7日23時。街は深い闇に包まれ、悪と呼ばれる者達が活発になる時間、典二は忍足あずみから教育を受けていた。

典二は従者部隊に配属される事となったが、実力は兎も角とかくまずそれ相応の従者部隊のルールや礼儀を勉強させられている。

他の従者部隊の人間に頼むに頼めない。何故なら夏に向けた『武士道プラン』や『KOF』の開催準備で人が足りない。猫の手は欲しくなくとも、ギリギリの人数で仕事を回しているのは事実。典二を育成する時間を持つ人は少ない。

なので学園が同じのあずみを時間の空いてる時に、典二の教師をしている。

教師と言っても、事前に渡した九鬼家従者部隊のルールブックの確認のみだ。あずみも英雄の専属メイドで、全国を巡る英雄と共にする時間が多いので、一時間や二時間程度しか時間が取れない。

取り敢えず今日までの課題と、暗記物は一通り終わった典二はあずみと談笑していた。

「まったく、驚いたぜ。こんなガキが666人を虐殺するなんて」

「虐殺なんて人聞きの悪い事を言わないでください。いいではないですか。死んでも自己責任と押しつけたのは九鬼ですよ？俺は死にたくないがために人を殺したんです」

「ハッ」と鼻で笑うあずみ。「確かにその通りだ。アレにサインした以上、死んでも文句は言えないな」

「それに、俺は感謝しているんです。九鬼に。あれほどの人を殺す経験は、今後の人生では味わえませんか」

「人を殺すのが好きなら軍にでも入隊すれば？ 私の知り合いがいっから紹介してやるよ。お前なら良い軍人になれるぜ？」

「いえ、遠慮します。人を殺すよりも面白い事があるので」

「ほう」と少し典二の話に興味を持つあずみ。

「あずみさんはどう思いますか？ 武神の川神百代を倒す事について」

「百代か。ありゃあ倒すのは無理だろ。知ってるか？ アイツ瞬間回復なんてチート技持ってんだぜ」

「ええ。その通りです。だから面白いんですよ。腕を切ってもすぐに生え、腹を裂いても傷口が塞がるなんて、世界広しと言えども百代さんだけです。だから挑戦し甲斐があるんですよ」

ふとあずみは時計を見ると、英雄の予定の時刻まで残り数分となっていた。

「私はもう行くぜ。今日のテストは問題無い。この調子なら『武士道プラン』までには紋白様のもとで働ける。じゃあな」

こうして、多忙な典二の一日が終了した。

明日は何か良い事があると良いなと楽しみにして寝床に入る典二であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0434z/>

真剣で恋する5秒前!

2011年12月2日21時45分発行